

台湾茶の歴史を訪ねる 第十五回

(15) 初期台湾茶業に貢献した日本人
～藤江勝太郎と可徳乾三（1）



須賀 努（コラムニスト／茶旅人）

日本統治時代、台湾の茶業は本格的な発展を見せた。清朝時代は、個々の茶商と茶農との関係で成り立っていた茶作り、そして茶の輸出。それを国家として茶業試験場を作り、体系的な製茶を行うことは勿論、茶業者を育てることまで始めたのは日本だった。今でも台湾茶業者が日本統治時代の茶業政策で感謝してくれるのは、まさに試験場と伝習所の設置だったと言ってもよい。

では一体誰がそれを実現したのか。現在台湾において日本時代に貢献した茶業関係者としては、魚池紅茶支所最後の所長、新井耕吉郎だけがクローズアップされているが、それだけでよいのだろうか。最初に試験場を作った人について語られることがないのはなぜだろうか。

台湾でも日本でもほとんど知られていない、茶業試験場を作り、初期台湾茶業の基礎を作り上げた男、藤江勝太郎について、今回は3年がかりで調べた成果を分かる範囲で述べてみたい。併わせて、九州茶業の恩人とも目されている可徳乾三。彼は明治時代、九州を代表して、シベリア・モンゴルに九州茶を売り込みに行き、ウラジオストク・ハバロフスクに販売拠点を築くなど、そのダイナミックな行動は驚くほどで、他に例を見ない。その可徳は一体なぜ台湾で亡くなったのか、そして藤江と可徳はどんな関係にあったのか。明治期をダイナミックに、グローバルな視点で生き抜いた2人の人生、一部推測を交えて考えてみたい。

遠州森町にて

「旅行けば 駿河の道に茶の香り 流れも清き大田川 若鮎おどる頃となる 松の緑の色も冴え 遠州森町よい茶の出どこ 娘やりたやお茶摘みに ここは名代の火伏の神 秋葉神社の参道に 産声上げし快男児 昭和の御代まで名を残す遠州森の石松を不弁ながらも務めます」とは、2代目広沢虎蔵の名調子、浪曲清水次郎長伝であまりにも有名なこのセリフ。

遠州森と言え、どうしても森の石松を思い出してしまう。実在の人物かどうかはよくわからないが、この町には石松の墓がある。大洞院というお寺の前にその墓はあった。墓石を削って持っている勝負運が付くと言われ、かなり削られていた。現在ある墓は3代目で、削られても壊れない

硬い石が採用されているという。豊橋のすぐ近く新所原という駅から天竜浜名湖鉄道に乗り、浜名湖畔の気賀を通り、柿の木が見えてくると、そこが遠州森町であった。博徒が名を遺すほど栄えた



静岡 森町 森の石松の墓

街道の街の歴史は古く、東西の中間点として、文化の接点でもあった。

藤江勝太郎は、台湾茶業の基礎を築いた人物だと思われるが、どのような人生を送ったのかはよく分からなかった。そこで出身地で、且つ帰国後は名誉町長も務めた森町なら何かわかるだろうと訪ねた次第だ。教育委員会には藤江家文書のコピーが残されており、それにより藤江の略歴などもおぼろげながら明らかになって来た。話を聞けば聞くほど、茶業における藤江の功績は大きいように思った。

しかし森町にはもう一人、台湾に深く関係した偉人がいた。鈴木藤三郎、台湾製糖の初代社長を務めた人物で、町としてはこちらの知名度を上げていこうと努力しているところだった。実際台湾に使節団を派遣し、台湾製糖と交流しているほか、冊子を作りその業績を顕彰するなどの活動を行っていた。近年台湾においても、試験場初代場長は誰かということに関心が高まる中、藤江が完全に鈴木藤三郎の陰に隠れているのは、残念でならない。それにしても当時の台湾の3大輸出品(樟脳、砂糖、茶)の内、2つがここ森町出身者により興されたというのは驚くべきことであり、森町という場所には更なる興味を覚えてしまう。

藤江勝太郎の生家にも行ってみた。特に表示な



森町 藤江勝太郎生家

どもなく、一人でふらっと来たら全く分からなかっただろう。現在は誰も住んでおらず、子孫は別の町に移っているとのことだった。森町は前述の浪曲でもお分かりの通り、明治初期には茶業が相当盛んだったようだが、今やそれを示すようなものも見当たらない。昔の町役場を利用した歴史民俗資料館も訪ね、藤江の写真を見つけたのがせめてもの収穫だった。

そういえば、埼玉県入間市博物館の学芸員で、茶の歴史に大変詳しい工藤宏さんと雑談した際、『大学時代は史学専攻で、同級生に藤江家ゆかりの学生がいて、藤江家文書を調べに行ったことがある』と話していたのを思い出した。往時藤江家はかなりの家柄だったであろうことは想像に難くない。

藤江勝太郎とは

台湾では日本統治が始まってすぐ、1903年に製茶試験場が開設され、その初代場長として改良場『場誌』(故徐英祥氏編集)にも記載されているのが、藤江勝太郎であった。彼は1865年、森町で生まれた。幕末から明治にかけて、この街から横浜に茶の商いに出た者は多くいたらしい。その一人



藤江勝太郎氏

に藤江という人物がおり、その子が藤江勝太郎。父の茶業はうまくいかなかったようだが、本人は横浜で緑茶の製法を学び、外国商人たちの商いの仕方、茶の扱い方を学んだに違いない。

その後郷里静岡に戻ったが、日本の茶業界は茶葉の供給過剰などに悩み、1880年代にはその前途が危ぶまれていた。危機感を持った人々の間では『緑茶以外に紅茶や烏龍茶の製造に着手すべき』『販路を米国以外に、英国やロシアに広げるべき』などの議論が出ており、世界市場で売れる紅茶や烏龍茶の製造法取得が急務であったと言われている。

そこで藤江は1887年に私費で中国湖北省、漢口に製茶修行の旅に出た。当時の漢口はロシアを筆頭に各国商人が茶葉争奪戦を繰り広げるなど、茶の一大貿易拠点となっており、茶の輸出を学ぶと同時に、ロシア、シベリア向けの紅磚茶（紅茶の粉末を固めたブロック型の茶）の製法を学ぶのに最適の場所であったと思われる。この紅磚茶製造知識が後に台湾で生かされていくことになる。

因みに日本紅茶の祖と称される多田元吉も明治初期、インド視察の1年前に漢口を含む湖北省を訪れており、この付近の茶業を視察している。現在中国茶業の中心は福建省や浙江省などだと思われるが、当時の漢口は、中国茶業最大の拠点



中国 漢口 当時輸出されていた茶葉

の一つであり、湖北省・湖南省は茶葉供給基地として大きな役割を担っていた。

また藤江は1887年前後に烏龍茶製法取得のため、まだ日本領ではなかった台湾に3回も渡り、現在の淡水付近で製茶修行に励んだという。藤江の報告書によれば、当時の台湾茶業の主要産地は淡水県であり、青心や紅心などの優良品種を栽培し、良質の烏龍茶を茶農ごとに製造していたとある。彼以前に日本人が本格的に烏龍茶製法を取得した例があるのかは不明であり、日本に烏龍茶製法が持ち込まれたのはこの時かもしれない。

それにしても、藤江という男、1880年代に中国の奥地湖北省とまだ日本領土でなかった台湾に私



茶業改良場 場誌を編集した故徐英祥氏



中国湖北省 現在の紅磚茶

費で製茶修行に行くというその情熱と行動力は凄い。まさにグローバルな視点に立ち、日本にない技術の習得に勤めた、極めてダイナミックな人物だったと言ってよいかと思う。彼の人生は明治期の茶業を知る上で、もっと検証されるべきだと感じている。

そして帰国後、烏龍茶の伝習所（学校）を作り、その教師に任命され、多くの弟子を育てた。更に1889年森町に日本烏龍紅茶会社を開業。この会社は米、英、独に紅茶、烏龍茶を直接輸出することが目的であった。同年には紅茶烏龍茶取締規則が制定され、静岡県製茶直輸会社とともに、日本烏龍紅茶会社は紅茶、烏龍茶の取締業務を委嘱されている。このような一連の動きを見ると、ある意味で藤江は『日本烏龍茶の祖』と言えるのではないだろうか。

翌年には藤江が私財を投じて、烏龍茶品評会を森町で開催している。ただその製品はアメリカなどにも輸出されたが、取引量が上がり次第に製造が減少、明治の終わりには激減して製造する者はほとんどいなくなっただろうか。これがその名が後世に残らなかった理由ではないか。一方紅茶は出来が良かったようで、1893年には藤江勝太郎の名で、皇室に紅茶を献上するまでになっていた。

1895年、日清戦争が終結し、下関条約にて台湾が日本に割譲されると、藤江は総督府の招きに応じて、すぐに台湾に渡り、台湾茶の振興に従事することになる。この時代に、日本の緑茶、台湾の烏龍茶、中国の志那風紅茶の製造をすべて理解している人材は彼をおいてなかったであろう。台湾総督府で技手に任ぜられ、早々に台北周辺の数か所で茶樹栽培を開始し、台湾に適した茶業とは何か、という調査に乗り出している。現在残っている試験場設置方何い（1897年に総督府あて提出）も恐らくは藤江自身が書いていると考えられる。

藤江の活動は極めて積極的で、台湾内ばかりでなく、海外視察にも出かけ、台湾茶業の方向性を見出そうとしている。1898年には福建省と広東省を訪ね、製法を学ぶと同時に茶の市況を調べている。1901年にはヨーロッパに渡り、合わせてスリランカなども視察している。紅茶製造に着目していたと思われるが、この頃は同時に台湾で日本緑茶を製造するという意欲も示していたようだ。

藤江の努力は実り、1901年総督府は台北の文化と桃園に茶樹栽培試験場を設置する。そして府1903年には殖産局付属製茶試験場を開設して、初代場長となる。試験場開設後は、緑茶と紅茶の可能性を追求している。ちょうどこの時期、日露戦



台湾 現在の茶業改良場



台湾 最初に製茶試験場のあった場所

争が勃発しており、後述する可徳乾三が販売していた九州磚茶の輸出が途絶えていた。1906年には台湾でロシア向けに紅磚茶を製造し、その品質も評価され、初めての輸出に成功している。これに可徳が関わっていたかは不明だが、そのルートがあったこと及び日本本土からではなく、台湾からの輸出というのが、輸出成功の秘訣だったのでは、と勝手に推測している。台湾紅茶は、この時初めて世界に出た。

翌年藤江はロシアやトルコを視察しており、紅磚茶輸出を本格化させる目論見があった。そして試験場はあくまでも試験をするところであり、藤江の目的は商業生産により台湾茶を輸出して、利益を上げることであり、これは日本の国策と合致するものであった。そのために横浜の安部幸兵衛などから出資を募り、1910年には日本台湾茶株式会社を設立して、これまで自らが使用していた試験場の土地、設備を借り受け、行ってきた茶葉生産業務を移管、試験場を休職して、現地責任者として専務取締役技師長となっている。

だが原因は不明ながら、当時の新聞によれば、茶葉製造は生産額が上がり、会社は多額の損害を被り、藤江はその責任を取って僅か1年で失意のうちに会社を去り、帰国してしまっている。折しもその1911年は、漢口のある武漢で、辛亥革命が勃発。もし生産が順調であれば漢口の混乱に乗じて、多額の利益を上げられた可能性もあっただけに何とも残念な結果となった。

その後は故郷に帰り、1915年から森町の名誉町長に就任し、13年間に渡って町の発展に尽力した。また茶業への関心も持ち続け、地元の茶業組合長などにも就任しているが、あの脚光を浴びた輝かしい表舞台に帰ってくることはなかったようで、1943年にその波乱の生涯を閉じている。

可徳乾三とは

今では九州の茶業者といえども、殆どその名が知られていない可徳乾三。筆者がその名を初めて聞いたのは3年ほど前、佐賀で国産紅茶専門店紅葉（くれは）を経営する岡本啓氏より『可徳乾三について調べられないか』と聞かれたのが始まりだった。可徳は明治時代の紅茶製造の第一人者であったと言われており、九州熊本出身で、日本のみならず、中国、ロシア、モンゴル、台湾と実にダイナミックに活動した人物だから、茶旅に重なるものを感じた。もし詳細が分かれば『九州茶の大恩人』ではないかとの予感があったが、その時はそれ以上皆目見当がつかず、そのまま時が流れた。

折に触れて気になっていた可徳の情報が少しずつ集まり始めたのは一昨年の後半から。彼の出身地である熊本県合志市（当時は合志村）の上田欣也市議会議員からご連絡があり、先日そのお墓にご案内頂き、『可徳』という極めて稀な名字の墓石が並んでいるのを見て、圧倒された。更には貴重な資料を頂戴して、可徳の略歴を簡単にまとめる所までようやく漕ぎつけた。因みに可徳家の墓石は真新しかったが、それは3年前の熊本地震により被害を受けて新しくされたばかりだったからだった。



熊本合志 可徳乾三の墓

可徳乾三は1854年合志村の農家に生まれる。合志は土地が痩せており、地元以外に活路を求めざるを得ない場所だった。父庄吾は日本の将来は養蚕と茶業だとの信念から、長男に農業を継がせ、次男に養蚕、三男だった乾三に茶業を学ばせる。1875年日本で最初に来たと言われる熊本山鹿の紅茶伝習所に入り、清国人から紅茶製造を学んでいる。この清国人は安徽出身で緑茶専門だったので、製造は残念ながらうまくはいかなかった。しかしその後も1876年には熊本人吉、その翌年には高知でも紅茶伝習所に入所して、製茶法の研鑽に勤め、1878年には熊本県内で紅茶製造を指導するまでになっていた。

因みに当時の紅茶伝習所がどのようなものであったか知りたいと思い、熊本人吉を訪ねてみたが、現在ほぼ資料は残っていないとのことで、地元の人もそのようなものがあつた事すら聞いたことはないとのことだった。山鹿、高知に問い合わせても、答えは同じであり、日本茶の歴史における紅茶の役割・比重がよく理解できる結果となつてしまっている。

その後製造だけでなく紅茶販売のために熊本で不知火社を設立、山茶を使った紅茶作り、販売を行っている。当時から熊本の山間部にはかなりの山茶が存在していたとの調査報告があり、山茶の葉は紅茶に向いていると考えられたのだろう。因みに人吉のある球磨地方では江戸時代には山茶を使った球磨茶が作られており、その茶は琉球に渡っていたとの歴史は興味深い。

紅茶百年史の読むと、1879年熊本県の有志（伝習所卒業生）は県から資金貸与を受け、人吉他2



熊本人吉 紅茶伝習所のあつた付近

か所に試験場を設け、可徳他が試製を行い、その商品を持って弁済に充てることとした、と書かれていた。当時可徳は既に相当の苦勞をして熊本で紅茶生産を開始していた様子が窺われる。そして横浜では日本紅茶直輸会社の設立に係わり、茶の商売に乗り出したが、当時勃興してきたインド・スリランカ紅茶との競争に敗れ、財産のほとんどを失ってしまったという。それでもめげずに、1887年には官費留学生として中国の漢口に渡り、当時ロシア向けに作られていた志那風紅茶（紅磚茶）の製造法を学んで戻つた。『袋踏法』という製法を編み出し、これが日本の紅茶製造を広めたともいうが、それがどのようなものだったのか、詳細はよくわからない。因みにこの年の官費留学生は4人いたが、他の3人は香港や上海に向かつており、可徳だけが漢口に派遣されたのは、初めから九州の山茶を使って紅磚茶を製造し、ロシア向けに輸出する意図があつたのではないかと、推測している。